

【ポスター発表】

模擬利用者を活用した相談援助演習の効果 その(1)

—相談援助実習後に実施した学生アンケートの結果から—

○ 皇學館大学 鵜沼 憲晴 (2453)

守本 友美 (皇學館大学・1619)

キーワード：相談援助演習、模擬利用者、コミュニケーション技術

1. 研究目的

社会福祉士は、近年の多様化・複層化したニーズに高度な相談援助技術で対応することが求められている。なかでも、コミュニケーション技術は相談援助の全過程において不可欠であり、とりわけ虐待や社会的孤立等のケースでは、信頼関係の構築に向けたより慎重かつ繊細なコミュニケーション技術が、以降の過程における重要な鍵となる。

しかし、相談援助演習におけるコミュニケーション技術習得は、多くの養成校がビネットやシナリオを用いた学生間ロールプレイにとどまっている。報告者は、この限界を超克すべく2013年度から学外のボランティアの協力を得て「模擬利用者」を活用した演習（以下：模擬利用者演習）を実施しており、「緊張感」・「臨場感」・「即応力」等、その教育的効果を検証・報告している（鵜沼・守本「効果的な相談援助演習のあり方 その(1)」第65回日本社会福祉学会報告2014）。

模擬利用者演習は、医療・看護教育における模擬患者演習やOSCEを参照したものである。近年における理学療法・歯科医学・薬学等への模擬患者演習の拡大・浸透、および上記高度なコミュニケーション技術の要請を鑑みれば、社会福祉士養成にも導入すべき教育方法であると考えられる。

本報告は、相談援助実習を終了した学生を対象にしたアンケートの結果を踏まえ、コミュニケーション技術の習得・定着に向けた模擬利用者演習の効果をあらためて検証するとともに、今後の課題を提起することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

アンケートの対象は、2015年8月～9月に相談援助実習を行った本学学生19名（当時3年生14名・4年生5名）である。アンケート票は、実習後の相談援助演習Ⅲ第2回目授業中（2015年10月8日）に配付し、第3回目授業後（同月15日）に回収した。

アンケート項目は、以下のとおりである。

1 実習のコミュニケーションで、模擬利用者演習が活かされた場面がありましたか？

1-2 上記で「おおいにあった」「あった」に○をした人は、どのような場面で活かされたと感じましたか？場所、対象とのやりとり、根拠等を具体的に書いてください

1-3 上記を踏まえ、実習でコミュニケーションを行うにあたり、模擬利用者演習にはどのような効果があると思いますか？

2 「ほとんどなかった」「なかった」に○をした人は、なぜそう判断したのでしょうか？

2-1 どのような模擬利用者演習であれば実習で効果が出ると思いますか？

1-2 および 1-3 の自由記述に対しては、コード分類およびカテゴリー分析を行った。

3. 倫理的配慮

本学会研究倫理指針および本学「人を対象とする研究」倫理規定に基づき、アンケート票の作成および当報告についての説明を行った。また回答したすべての学生から、アンケート結果を開示することについて承諾を得た。

4. 研究結果

上記設問 1 では、「おおいにあった」5人、「あった」10人、「ほとんどなかった」3人、「なかった」1人であった。

設問 1-2 では、利用者との「関係形成」・「導入」あるいは利用者が「消極的」・「否定的」な言葉を漏らした場面での、「反復」、「感情の反射」、「意図的な感情表出」、「声のトーン」、「表情」等のコミュニケーション技術が多かった。また、「予め見つけていた自己課題を意識しながら関わる事ができた」、「自信が持てるようになったため積極的に利用者との会話に挑めた」等、目的意識的な実習態度を根拠とする回答がみられた。

設問 1-3 では、学生間ロールプレイと相違する「緊張感」や「臨場感」等、上記報告と同旨効果があらためて明らかになった。また、「実習時の緊張緩和」、「実習でのコミュニケーション技術の意図的な駆使」、「実習におけるコミュニケーション技術定着の実感」等、充実した実習を実現する機会となっていたことが新たに判明した。

一方、設問 2 では、「1対1の場面が少なかった」、「児童に対するコミュ技術は、大人と大きく相違していた」、「重度知的障害者であったため、コミュ技術が通用しなかった」、「ポジショニングに関して、横や斜めに座ることができず、距離が離れたまませざるを得ないときもあった」、「敬語ばかりだと、いつまでもよそよそしい態度しかとられなかった」、「社協は、個人とゆっくり話をする機会がほとんどなかった」等の回答があった。

これらを受け、設問 2-1 では、「児童の模擬利用者演習」、「1対複数の話を行う演習」、「児童や知的障害者等、利用者にバリエーションがあるとよい」、「対面のみならず、寝たきりや並列といったポジショニングの設定」等の提案があった。

5. 考察

設問 1～1-3 に対する回答から、実習時のコミュニケーション技術の習得・定着において、模擬利用者演習は有効であると判断しうる結果となった。それは、模擬利用者演習における実践現場の再現性が、学生の「緊張感」・「臨場感」をもたらし、結果、実習時の「緊張緩和」や「技術の意図的な駆使」につながったと考える。

しかし、設問 2 から、児童福祉施設や社会福祉協議会で実習した学生には、あまり効果が感じられなかった事が判明した。設問 2-1 の回答を踏まえ、今後は児童福祉施設や重度知的障害者のビネットを用意する等、模擬利用者演習の補完策を講じる必要がある。

※質疑応答時間帯では、DVDにて実際の模擬利用者演習の様子をご覧いただく予定です。